

# 昭和初期の『婦人倶楽部』の連載小説における女性の教養と職業

— 鶴見祐輔作『母』(1929)を例として —

Women's Cultural Education and Occupation in Serial Novels in the Early Showa Period:

Focusing on *Mother* by Tsurumi Yusuke(1929)

李 承京\*

SeungKyung LEE

## 1. はじめに

### 1.1 問題の所在—女性の教養とは

「女性の教養」とは、普通どのような時に言及されるだろうか。例えば美人コンテストがあるだろう。美人コンテストでは、参加者の美貌に加え、彼女の学歴や特技、趣味が問題になる。生まれながらの「美」に、努力して身につける「教養」としての学歴、特技、上品な趣味がプラスされ、「真の美人」の選別基準になるのである。小平はミス・コンテストで「教養」が条件になったということは、美に自分の努力という人間性がプラスされたことを意味し、それによって教養は抑圧の御先棒を担ぐことになったと指摘する(小平,2016)。

しかし女性に教養を求めることは、女性も「人間」になれるという発想から生じるものであり、それは前近代の女性観をひっくり返すもの

でもある。元々、教養とは、本を読むことで人間としての理想的成長を目指すことを意味し、その主体はエリート男性に限られていた。それが、近代に入ってから女性や非エリートにも教養が求められるようになったのである。その意味で、女性に教養を求めることを、女性解放の論理として読み取ることもできるのである。

本稿の分析対象である鶴見祐輔の『母』は、1927年5月から1929年6月まで『婦人倶楽部』で連載された長編小説である。『母』は、作者の鶴見が、1929年の単行本序文で「政治思想のプロパガンダとして小説の形を選んだ」と書いたように、女性啓蒙小説である。そのため、鶴見が女性啓蒙の目的のために駆使した教養のレトリックを分析することで、昭和初期の教養

\* 東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：教養主義、昭和初期、職業婦人、『婦人倶楽部』

主義と女性の関係が考察できる。文化的ヘゲモニーによって、教養を達成する方法やそこで求められる具体的な資質の内容が変化し、それぞれの時代状況に応じて「新しい」教養や「現在

## 1.2 先行研究と本稿の立場

先行研究の確認において、まず近代日本の教養主義と修養主義の関係をまとめる必要がある。筒井によると「修養」という用語・観念が登場し、国民の比較的広い層に社会意識として受容され始めた時期は明治 30～40 年代である。この時期は学生数が急増し、限られた「成功」青年だけが立身出世できる時期で、競争で脱落した「墮落」青年や「煩悶」青年のアノミー状況への対応として「修養」を直接・間接に目的とする思想・運動が多様な形で登場した（筒井,1995）。このような修養主義運動の中で野間清治による講談社の設立は大衆雑誌というマス・メディアを動員し修養主義を広げた運動として注目すべきである。

このような大衆を意識した修養主義ムードの中で学生文化としての教養主義が登場する。旧制高等学校や帝大学生の読書実態を分析した竹内洋は岩波文庫というエージェントを中心としたエリート学生文化の成立を考察し、日本型教養主義を明らかにした（竹内,2003）。竹内によると近代日本の教養主義は学歴エリートが「教養」というメッキによって「インテリ」や「知識人」という身分文化を獲得する手段としての意味も持つ。しかし、竹内も筒井も指摘しているように大衆における修養主義（講談社文化）も学歴エリートにおける教養主義（岩波文化）も人々を教育・啓蒙する論理に基づいて成り

の」教養が語られるとみるとき（渡辺,1997）、『母』は、昭和初期の教養論者が女性に新しく求めた教養の有様が確認できるテキストなのである。

立っている点でむしろ類似している。そして、1930 年代になると一部のエリートだけの大正教養主義は国民を視野に入れた昭和教養主義へ転換する。渡辺かよ子は、河合栄治朗らによって再興した 1930 年代の教養論を分析した（渡辺,1997）。渡辺は、昭和の教養論が、それまでの大正教養主義における「個と普遍をつなぐ媒体を持たない抽象的思考への批判から、エリート男性学生だけではなく、女性や非エリートも含む国民全体を射程にのこした国民的教養論に転換」を試みたと指摘した。渡辺の指摘は、昭和になってから女性も教養を持つべき人間として認識されはじめたことを示唆するが、この時期は、「国民的公共性＝国民雑誌」（佐藤,2002）が成立した時期とも重なる。

このような近代日本の教養主義と修養主義の歴史をふまえると、今までの先行研究は特殊なエリート学生文化にだけ焦点をあてており、大正・昭和に大衆的に広まった教養主義の全体像を読み取るには不十分な議論である。つまり「東大生以外」の教養主義の実体を捉えられていないのである。この議論に女性が含まれていないのは当然である。近代女性の教養主義に関する最近の研究の中で小平麻衣子の『夢見る教養』（2016）は、昭和の教養主義におけるエリート男性と女性の不公平な関係を明らかにした優れた成果である。小平は、女性の教養が職業と結

びついて語られる1つの場として文芸雑誌の投稿欄をあげ、装飾的教養としての文学少女ではなく、実用的教養としての文学の職業化を目指した女性読者と、それを妨害した文壇の既成男性作家の関係を考察した。

しかし、小平が分析した『新女苑』は、高等女子学校卒業生というごく少ないエリート女性をターゲットとした雑誌であるため、昭和の大衆女性に求められた一般的な教養の実体をみるには、十分ではない。斎藤美奈子も指摘したように、女学生は特権階級であり、それ以外の女性のほとんどは家計のために働かなければならない女中や女工だった(斎藤,2000)。本稿は『新女苑』が対象とした女学生より幅広い女性階層として職業婦人を考える。斎藤の分類によると、俸給生活者で、ホワイトカラーの職業婦人も特権階級に近いが、昭和に入ってからの手不足によって学歴を持たない女性も職業婦人に編入することになった。また、雑誌の消費ができるほどの経済的な余裕をまだ持たない女中や女工と比べ、職業婦人は相当な消費力を持っていた。そのため昭和の女性と教養主義と大衆雑誌の関係を考察するにあたって、「職業婦人」という集団を考察すべきである。

講談社発行の『婦人倶楽部』はこの職業婦人がいち早く読んでいた雑誌であり、それゆえ女

学生よりは広い女性層がどのようなテキストを読んでいたかが推測できる資料としての意味を持つ。それゆえ、本稿は一部のエリート男性や女性の間で共有されていた教養主義ではなく、大衆雑誌を中心に広まっていく大衆教養主義を把握するため、『婦人倶楽部』を分析対象として選んだ。『婦人倶楽部』は、「発売禁止になったことは一度もなかった」(社会編・明 1959)との証言からもわかるように、国家順応的な雑誌であり、センセーショナルな三面記事で溢れた月並みの婦人雑誌であった。そのため婦人雑誌研究の中ではほぼ取り上げられていなかった。<sup>1</sup> しかし、学歴や専門的能力を必要としない「モダン職業婦人」<sup>2</sup>のイメージを前面に出した点で、より一般的な女性をめぐる教養主義と職業に関する言説を確認することができると思われる。

本稿は、①『婦人倶楽部』の主な読者層 ②講談社社長の野間清治と作者の鶴見祐輔の連帯による「母」の企画の詳細を考察することで、『母』が連載された当時の『婦人倶楽部』をめぐる社会的な文脈を明らかにする。そして、『母』のテキストを分析し、「理想的な人間」として生きる方法を語るテキストとしての『母』の意味を考察する。

## 2. 『婦人倶楽部』における『母』の連載

### 2.1 『婦人倶楽部』の読者層

戦前の婦人雑誌の読者層の資料として戦前の『女性読書調査』がある。戦前の女性読書調査の主な対象となったのは、「職業婦人」「女学生」

「女工」の階層で、この3者は、知的エリートの女学生と大衆の女工、その間の存在としての職業婦人が社会的に好対照をなしていた(永

嶺, 1997)。この中で「職業婦人」<sup>3</sup>は、戦前期の日本において従来男性の仕事とされてきたやや事務的で専門的な分野や第3次産業の発展に伴い新しく誕生した分野の職業に就いた女性のこと（山崎, 2009）を言うが、この女性層は大衆雑誌を買うぐらいの消費力を持っていた。それゆえ戦前女性読者調査資料分類でも早い時期に読者層として登場する。

永嶺の戦前女性読者調査資料分類にしたがって、1919年から1935年までの雑誌購読状況を見ると、『婦人倶楽部』が、はじめて読書調査

に登場するのは、職業婦人を対象とした1922年の東京市社会局の『職業婦人に関する調査』である。年齢の幅が広い職業婦人を対象とする調査を見ることで、『婦人倶楽部』の読者層がより明確に見える。1931年の東京府社会課による『求職婦人の環境調査』では、雑誌購読の年齢別の傾向が現れているが、『婦人倶楽部』と『主婦之友』の読者層が集計されている。次の表は年齢別読書傾向表を『婦人倶楽部』と『主婦之友』を中心にまとめた表である。

表1：求職婦人の年齢別『主婦之友』と『婦人倶楽部』の購読傾向<sup>4</sup>

年齢		15未満	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	…	30以上	小計	合計	割合 (%)
婦人倶楽部	単	3	24	51	111	190	198	140	91	66	26	10	…	1	939	1260	39.99
	併	0	2	22	29	60	73	39	44	22	18	3	…	2	321		
主婦の友	単	1	13	19	59	113	84	101	46	46	29	21	…	18	587	747	23.71
	併	1	1	6	11	34	27	24	26	10	7	4	…	2	160		

表をみると、『婦人倶楽部』を読む求職婦人の割合が『主婦之友』より高いことがわかる。

1934年に行われた「職業婦人読書傾向調査」の「愛読雑誌調」でも、14歳から17歳までの少年期と18歳から24歳までの青年期は『婦人倶楽部』を最も多く読んでいたが、24歳以降の成人期では『主婦之友』が最も多く読まれていた。『婦人倶楽部』と『主婦之友』は、職業婦人と女学生の両階層で読まれていたことは確かであるが、『主婦之友』は、20代後半の女性が、『婦人倶楽部』は、10代前半から20代前半の女性が読んでいたことがわかる。このような読者層の相違は、当時の『婦人倶楽部』の編集側も把握していた。『講談倶楽部』の編集長だった原田常治は「『主婦之友』の平均年齢は33歳

ぐらいで『婦人倶楽部』の平均年齢はそれより10歳若い」と話している（社会編・昭, 1959）。

以上、戦前の『女性読書調査』をみると、『婦人倶楽部』は10代前半から20代前半の若い女性の間で幅広く読まれていたことがわかった。特に、職業婦人を対象とした読書調査で、もっとも早い時期に『婦人倶楽部』が登場したことには注目しておきたい。戦前期の日本の都市部では、産業化の進展や第3次産業の拡大に伴う安価で柔軟な労働力需要の高まりによって、職業婦人の数は、1920年から1940年にかけて35万人から175万人への5倍に増加した（山崎, 2009）。職業婦人の教養の理想を語った小説『母』が、職業婦人が読んでいた『婦人倶楽部』に掲載されたことの含意に注目しなければなら

ない。作者の鶴見が職業婦人の読者を意識していたかどうかは、確認できないが、当時の『婦人倶楽部』の編集側がすでに読者層を把握して

## 2.2 『婦人倶楽部』における『母』の企画

1927年の『婦人倶楽部』の1月号から連載がはじまった松岡譲の「憂鬱な愛人」が一連の騒ぎで休載<sup>6</sup>となり、同年5月から鶴見祐輔の『母』が連載され、1929年の6月号で完結した。挿絵は伊東深水が担当した。

『母』の分類表記の変化をみると、1928年の6月号からは「理想小説」として表記されていたことがわかる。編集を担当した加藤謙一は、「理想小説とは、普通の恋愛小説でなく、社長のよくいう人倫五常をおもしろく、感激的に内容にもりこんだもの」と語っている。また、野間が鶴見に対して相当な期待感を持っていたことも表明した。<sup>7</sup>

何故、野間は、小説を書いたこともない鶴見に理想小説を書かせたのか。当時の婦人雑誌の編集方針が新聞小説の分野ですでに声価の高かった大家に、惰性的に執筆させるという安易な企画にならずにいた（前田,2001）ことを考えると、鶴見の起用が革新的だったのは間違いない。野間の決断には、当時の講談社特有の編集方針と作家の関係をめぐるある事情が存在していた。

大宅壮一は、講談社の出版物に対し「もっとも神聖であるべき創作までが、どしどし変質させられるのだから、少しでも個性や芸術的良心をもった作家はやりきれないわけだ」と言い、そのイデオロギー性を批判した（大宅,1935）。大宅が批判したのは、編集側の小説家に対する

それに相応しい小説を依頼していたこと<sup>5</sup>を考えると、鶴見もある程度、職業婦人の読者を意識していたのではないかと思われる。

強引な修正要求で、作家の近松秋江は「不道徳な恋愛を描いたところ、醇風美俗に反するというので数回書き直しを命ぜられた」という。

近松秋江の例を見てもわかるように、講談社の修正要求は、単に売り上げのためではなく、野間のいう「人倫五常をおもしろく、感激的に内容にもりこんだもの」のための要求であった。それが、創作の自由を求める作家と衝突するのは当然である。掛川トミ子は、野間の思想にみえる「反学問主義」を指摘するが、そこには、徳や修養が学問を超越すると考える野間の態度が現れているとする（掛川,1959）。野間が否定していたのが、現代の語感で言うところの「学問」ではなく小説家の「芸術」性であるとすれば、野間の思想は「反芸術主義」としてみることもできるだろう。それゆえ、野間が求めた小説が、自由な創作を求める作家たちより、政治家だった鶴見に適した仕事だったのだ。

さらに野間は、『婦人倶楽部』の内容全体にもしきりに関与しようとしていた。例えば『婦人倶楽部』の編集長の茂木茂は、1937年に「夫の貞操、妻の貞操」の座談会を企画したところ、野間に怒られたことを述べている（社会編・昭,1959）。この座談会は、吉屋信子の新聞連載小説の「夫の貞操」の大ヒットから触発された企画で、売り上げだけを考えると話題性ある企画だったことは間違いない。このような挿話の

中にしばしば指摘された『婦人倶楽部』が『主婦之友』より2、3万部の劣勢をみせた理由、つまり、「『主婦之友』程の思い切った俗悪振りに転化しえない野間清治の雑誌報国主義の障

### 2.3 『母』作者の鶴見祐輔と野間清治

鶴見祐輔は1885年生まれの政治家、著述家である。鉄道官僚時代から外国出張を経験し、旅行記や随筆を発表していた。1906年に旧制第一高等学校の英法科を首席で卒業し、同年、東京帝国大学法科大学政治学科に入学した。1906年に校長に赴任した新渡戸稲造の弟子でもある。新渡戸が一高に赴任して弁論部や文芸部の活動を通じて教養のある学生文化を推し進めた時期（竹内,2012）を生きた典型的なエリートだったことがわかる。

思想家としての鶴見祐輔の思想は、新渡戸の影響をうけているが、キリスト教やカーライルを初めとする西洋思想から汲みだしたのではなく、日本の固有・伝統的な思想の中から汲みだしたものであり、多分に日本主義・保守主義的要素が強い（松井,1998）。息子の鶴見俊輔は「父親は、勉強だけでの上がってきた人だったんだ。（中略）近代化するには、こういう人間を養成することが必要だったんだ。」と述べている。さらに鶴見祐輔は、このような人間は「自由主義が流行れば自由主義の模範答案を書き、軍国主義が流行れば軍国主義の模範答案を書くような人間」になる（鶴見、上野、小熊、2004）と述べ、典型的な近代知識人としての父を批判した。吉見俊哉は、鶴見の思想における、近代日本の「国家」からの離脱と相対化が、エリート政治家の父に対する不信感に起因するも

害」<sup>8</sup>がうかがえるのである。では、野間が思い切って小説を書かせることをきめた鶴見祐輔とはどのような人物だったのか。

のであると分析する（吉見,2012）<sup>9</sup>。

鶴見祐輔は1920年代から新しく現れた大衆メディアをいち早く活用したメディア知識人もあった。鶴見は演説が上手く、欧米での演説活動だけではなく、1921年には日本各地で200回をこえる演説をこなしていた（上品,2011）。また、演説、新聞、ラジオの3つの媒体を区別して活用するなど、大衆とのコミュニケーションを得意としていた。講談社は1920年代のニューメディアで登場したラジオが生み出した公共圏を、『キング』のような大衆雑誌を通じて構築しようとした（佐藤,2002）のだが、鶴見はその講談社のねらいにマッチする人物だったことがわかる。それゆえ鶴見は『婦人倶楽部』だけではなく、多くの講談社の雑誌に文章を書いていたのだ<sup>10</sup>。

鶴見は、『母』の単行本が出版された直後の1929年7月の『婦人倶楽部』に、評論の「新日本を生む力」を発表した。その中で「日本を救う力を、清純な「母」の愛のうちに求める」と述べ、理想的な母としての日本女性が日本を救うと主張した。また、『母』にたいし「昨年私の著述した英雄待望論の姉妹編」であると述べている。ここで挙げられている『英雄待望論』とは、1928年に単行本の『母』と同じく大日本雄弁会講談社から出版された本で、「日本の国策を提示したもの」（鶴見,1928）であった。

鶴見が1928年と1929年に出した『英雄待望論』と単行本の『母』は、国家主義的観点から性別役割分業に基づいて個人の教養と義務を書いた本としてみるができる。それゆえ、出版社も後の『母』の宣伝において「小説の形をとった新しき女大学とも称すべく」<sup>11</sup>と記述している。

『母』連載中の1928年1月21日に行われた普通選挙で、鶴見は驚異的な得票数で当選する。野間は「鶴見に対して直接の政治資金は与えていなかったが、その代わりに彼に『母』を書く舞台を提供し、ちょうど選挙にさしかかった

ので、それをことさらに大々的に新聞広告をして、彼の選挙に間接の声援を与えた」という（社会編・昭，1959）。大宅が痛烈に批判した「講談社イデオロギー」（大宅，1935）とは、このようなことを指しているのだろう。

後述するが、『婦人倶楽部』の『母』連載は大成功で終わった。作者の鶴見は当選し、『婦人倶楽部』の販売部数は伸び、ウインウインの結果となったのである。次には、『母』の内容を、①女性に求められた新しい教養②職業婦人に求められる選択③進というエリート男性への帰結の3つの観点から分析する。

### 3. 『母』<sup>12</sup>の内容分析

#### 3.1 朝子の教養

主人公の朝子は自分のことを「私があまり無教育なものですから…」と語る無学な女性である。しかし朝子は、読書、経済学者や婦人運動家の指導、学校教育を通じて身につけた教養をもって人生の危機を突破していく。彼女の教養がもっとも発揮される時は、夫の病死の後、3人の子供を抱えて職業婦人として働く時である。寮母になった朝子は、働きながらも女学校の生徒たちと一緒に授業に出て「一生懸命に学問」する。【引用】「朝子は初めて、数学というものの興味を知った。（中略）彼女は初めて代数を学び、初めて幾何学の面白さを知った。」<sup>13</sup>

朝子が興味を持つのが、数学であることには注目しておきたい。「頗る打算力に富んでいた」朝子は後に株式の投資で成功する。また、朝子の理性的教養は、当時の婦人たちの「感性豊か

さ」とも比較される。朝子の知人で女学校の校長の長谷川は、女子教育の問題を次のように語る。【引用】「日本の女は、理性の教育をうけていないから、まるでセンチメンタルで、少しのことでも自分の判断がつかない。」<sup>14</sup>

小山静子は、明治30年代に確立した良妻賢母思想が、婦人問題の登場と第1次世界大戦を期に転換し、女子教育観の再編をもたらしたと指摘する（小山，1991）。その中でも家庭改良や家事の合理化のための「科学思想の導入」が主張されるが、長谷川が語る「理性の教育」も当時の言説の延長線上にあるものとして考えられる。

例えば、東京女子高等師範学校教授の下田次郎は、「女子の学校は家事の研究を進め、一層有効な家事の教授をなさねばならぬ。これは家庭は勿論、一国の経済と大関係がある」<sup>15</sup>と指

摘し、家事教育における科学性を主張する。また、東京教育博物館の館長で、生活改善運動家として活躍した棚橋源太郎も、「各家庭に於いて競って科学的知識を導き入れ、婦人の作業能率を高めて、物資の節約利用に努めることは実に今日の急務である」と主張する。<sup>16</sup> 下田や棚橋の主張は、家事教科の科学的な改良を求めるものであったが、このような姿勢は、学校だけではなく大衆婦人雑誌の実用記事からも読み取れる。

大正・昭和の大衆婦人雑誌は、競って家事の実用記事を掲載した。瀬戸内晴海は『婦人倶楽部』のことを「母はその付録を見て、私と姉の洋服を縫ったり、糸でセーターやオーバーまで編んで着せた」<sup>17</sup>と回想している。このように、婦人雑誌の実用記事は、教育機関で家事を習う機会がない大衆女性にとっての教育の場として機能した。それゆえ『婦人倶楽部』の実用記事の執筆にあたっては、載せる項目の実用性を実証実験していたため

相当な手間がかかっていた。<sup>18</sup> 実験によって正確に書かれた型紙の付録や料理記事は、標準化・計量化を通じて作成された1つの知識として、また、それ自体が、科学的・合理的に家事をすることへの規範として読まれていたと考えられる。それゆえ『母』で賞賛される朝子の優れた能力は、昭和の女性に新たに求められた合理性・科学性のシンボルとして読むことができるのである。

一方、日本の婦人が「感性ばかり発達している」と批判した長谷川の言葉どおり、女性の「感性豊かさ」は、特に、「小説を読む女学生」と

結びついて批判的となる。1923年に小説家の島田清次郎が起こした女学生拉致事件は、「小説を読む女学生」の軽率、虚栄が強調された代表的な事件である。1923年5月の『女性日本人』の記事は、事件の女学生を批判しながら「少なくとも教養のある女性として」の自覚をもつことを勧告している。女学生の小説耽読に対する批判的視線は、中野好夫が、1939年9月の「学生論」で、読書が文学書に偏ることからくる感情の過剰、歴史的な物の見方の不足を克服することを主張するまで、昭和の教育言説において主流になっていた。『母』でも、朝子の教養の成長において歴史書や数学や経済の知識は重要な役割りを果たすが、小説は否定的に描かれている。<sup>19</sup>

以上、朝子の人生を通じて、当時の女性に求められた新しい教養がどのように表象されていたかを確認した。これらの教養は、脈絡によっては単なる「教育」や「知識」と呼ぶこともできるだろう。しかし、絶えず努力する朝子の姿勢は、単に生計のために学んで働くという次元を越えて、理想的な人間になるため努力するという教養主義的な意味を十分持っている。作者が朝子を通じて読者に伝えたいのは、科学や経済学の断片的な知識を学べということではない。学ぶ対象がどのようなものであれ、精進する姿勢が強調されているのである。この意味で『母』は、それまでの女性に求められていた上品な趣味や話し方のような装飾的な教養ではなく、人間の資格としての教養を女性にも求めたテキストとしてみることができるのである。



### 3.2 職業婦人の選択

『母』は職業婦人の成功物語でもある。朝子は大胆な株投資をしながら「生まれて初めて、自分の力を意識した」のである。しかし結末で朝子は、仕事をやめて家庭にもどることを決心する。このことに朝子の精神的支柱であった長谷川も賛同する。

【引用】「なんとといっても日本では、女はまだ一本立ちで働きはできませんよ。(中略) 女の境遇の改善せられて、社会の思想のなおるまではやっぱり女の領分は家庭ですわね。」<sup>20</sup>

朝子の職業婦人としての目的は、子供の学資ができた時点で達成される。その結果、朝子が職業婦人として果たした劇的な成功は、クライマックスのための装置に止まりその大義名分は家庭へ還元されてしまう。この場面から分るのは、職業と家庭の両立という職業婦人をめぐるジレンマである。1924年8月号の『婦人倶楽部』で、評論家の室伏高信は、「職業婦人に真の幸福がありえようとも思わないし、また職業婦人と家庭生活とが両立することのできるものとも思わない」<sup>21</sup>といい、職業婦人を否定する発言をするが、『婦人倶楽部』だけではなく、多くの婦人雑誌には職業婦人の化粧やファッションを風刺的に語る記事が多く掲載された。つまり職業婦人はすべての人から歓迎された存在ではなかったのである。

しかし職業婦人という労働力は「必要な害悪」であるため、家庭と職業の両立を模索する意見も続々提出される。1929年8月号の『婦人倶楽部』の「職業婦人は奥様としてなぜ好かれるでせうか、嫌はれるでせうか」の主題で、いく

つかの評論が掲載されたが、その中で、大妻コタカは、内職の奨励を主張する。内職・副業は、1918年の米騒動を前後する時期から積極的に政策として奨励される(小山,1991)。『母』でも、朝子は「何か家でできる商売をしてみようと思いついた」といい、寮母をやめて薬局運営という内職を選ぶのである。

大正末期から昭和初期の職業婦人の急増は、中間階層家庭の女子の賃金労働化が始まったことを意味する。第1次世界大戦後の急激な経済組織の再編と物価騰貴と不況によって、それまでは働く必要がなかった中間階級の女性も働かなければならなくなった。朝子も、突然の夫の病死によって職業前線に追い込まれた。しかし良妻賢母は、中流以上の階級の女性に要求された規範である(岩下,1969)。そのため職業婦人の存在は、良妻賢母の規範と労働力の必要の間で、矛盾を抱えることになる。内職は、職業婦人におけるこのような矛盾を解消する策として提出されたのである。

このように、良妻賢母の規範は女性が職業を持つ理由をつねに家庭へ帰属させようとする。『婦人倶楽部』を読んでいた職業婦人たちが朝子の選択をどのように受け入れたかは、今のところ確認できない。しかし、『母』の大々的な成功<sup>22</sup>からみると、当時の読者たちの共感を得たことは確かである。職業婦人に対する抑圧的なテキストとして読むことができる『母』は、何故成功することができたのか。次には「進」というキャラクターのリアリティーを中心に『母』の成功要因を分析する。

### 3.3 進という未来のリアリティー

『母』には、朝子の母としての苦勞と息子の進の成長が、並行して描かれている。朝子が夢見る進の未来は、一高と帝大を卒業して「立派な教育をさして（中略）立派な人間」に仕立てることである。しかし、この「立派な人間」とは、単に一高、帝大出身のエリートのことを言っているだけではない。『母』には、3人の一高出身のエリートが登場する。「詩人」の文学青年の大河澄男、「本ばかり読んでいる人」の経済学者の木下一郎、「現金的な立身出世主義」の銀行家の山路進一郎の3人がそれである。だが、大河澄男は病死し、木下一郎は日本社会から背を向けてアメリカへ行き、山路進一郎は悪役として描かれている。

このことからわかるように作者は、この3人を理想的なエリートとして描いていない。そのかわり「英雄伝」が好きで、将来の夢が政治家である進が、理想的なエリート像として提示される。

ここで注目したいのは、進のキャラクターと作者の鶴見の人物像が類似していることである。講談社社員の天田幸男は、「昭和3年、第1回普通選挙で先生が当選して人気でたんです。さらに小説を書いたものだから非常な人気、それで万事が非常に都合よくいった」（社会編・昭,1959）といい、単行本の『母』の成功に、鶴見の政治家としての人気関わっていたことを話した。『婦人倶楽部』の『母』関連記事をもみても、人気政治家としての鶴見の知名度を積極的に活用していたことがわかる<sup>23</sup>。鶴

見もまた、1929年6月の『婦人倶楽部』の「『母』の出版について読者へ」で、「この小説を書いている過去2年間の間、私は至るところの読者諸君より、直接間接、熱烈の御激励をうけたことをあつく感謝する」と書いており、彼が連載中に実感していた『母』の人气が、相当なものだったことがわかる。単行本の出版部数の予想でも、鶴見は、「当時日本中を演説して歩いていたから、うけているか否かがわかって」いたため、初版5万を予想した。結局、初版1万部にした講談社側の予測を大きく上回り、24万部がうれて、1930年1月の『婦人倶楽部』の記事によると、『母』は、単行本として340版を突破した<sup>24</sup>。

結局、政治家を夢見る進のリアリティーは鶴見の政治家としての人気と結びついて獲得できたのではないかと思われる。結末で、朝子は、職業婦人としての自分の人生が「財産のための戦い」であったことに気づく。「独立した人間」としての朝子の理性的な教養と職業は、結末において「財産」という世俗的な価値として否定されるのである。ここにおいて、人間の理想的成長を語る教養のレトリックの主体は、無学の女性の朝子から一高・帝大の未来が待っている男性エリートに進にかわる。それゆえ、病死でフェードアウトする朝子と鶴見という実体性をもって現れる進の並行的配置は、教養主義が語る人間の普遍性が、まだ、女性には開かれていないことを暗示するのである。

## 4. おわりに

本稿は『婦人倶楽部』の『母』の企画背景とその内容分析を通じて、昭和教養主義のテキストが定義した女性の理想的な教養の有様を明らかにした。マルクス主義や婦人運動から「大衆」を認識した昭和教養主義は、科学的理性、母としての犠牲精神を通じて女性の理想的な教養を語る。一方、朝子の精進する生き方とそれへの補償としての息子の進は、女性も努力すると自立した人間として生きることができるというある可能性もみせてくれる。それゆえ、『母』は、抑圧の物語としても、解放の物語としても読むことができるのである。

以上の分析をふまえると『母』は、昭和期から活発になる「女性の国民化」言説の中で雑誌側が積極的に企画した小説だったことがわかる。佐藤は日本の新しい「国民化」の契機となった1923年の関東大地震の以降から国家の運営に「財産と教養」を持つ「市民」だけではなく女性や非エリートまでを含む「大衆」も参加させることになった（佐藤,2002）と指摘する。すなわちベネディクト・アンダーソンの言う想像の政治共同体としての「国民」に女性も参加させる必要が現れたのであり、このような「想像」のためには政治家の鶴見や雑誌社社長の野間のようなオピニオンリーダーたちによる企画が必要だった。また物語においても朝子の国民

としての可能性は、エリート男性を生んで育てる母の役割に限定されるが、女性にも自立した人間としての道があることを語った点で、当時の共感を得たのではないか。さらにいえば職業婦人という近代的な女性の生き方を経験しはじめた女性たちにとって、職業婦人としての悪戦苦闘する朝子の姿は現実的なメロドラマとして受け入れられていたのではないか。

本稿の分析は『婦人倶楽部』の『母』連載における社会的な文脈や読者層に目配りし、小説の内容分析が不十分だった限界を持つ。また、実際の読者層についてもより詳しい分析が必要である。それには、男性教養知識人が残した数多くのテキストにくらべ、女性のテキストはごく少ないという資料上の制約もある。しかし、女性雑誌の名の無い読者の投稿欄の分析を通じて、文学少女の教養主義への熱望と挫折を明らかにした小平の研究（小平,2016）のように、現在、新しい資料の発見と研究も活発に行われている。それゆえ、今後の課題として、大衆婦人雑誌テキストのメッセージ分析だけではなく、それをめぐる読者のメッセージ受容と変容の過程までを追及し、大衆婦人雑誌の場で行われた男性教養知識人と女性大衆の関係性におけるダイナミックスをより明らかにしたい。

### 註

- <sup>1</sup> 『主婦之友』は婦人読者に「主婦」のアイデンティティを与え、『婦人公論』は知識階層の婦人を対象とした。だが、『婦人倶楽部』には、明確な特徴が現れていない。このことが『婦人倶楽部』が注目されてこなかった理由であると考えられる。
- <sup>2</sup> 山崎景子は戦間期の『婦人倶楽部』の職業婦人記事群の分析を通じて、「あるべき理想の職業婦人」イメージの変容を明らかにした。それによると、1920年代までは「あるべき理想の職業婦人」イメージとして「社会的自立」を目指す「伝統的職業婦人」

が優勢であったが、1930年代以降には「人柄のよい」「モダン職業婦人」へ変っていく。「モダン職業婦人」のイメージは、低賃金で制約的な雇用環境に置かれているため、社会的な自立の可能性が低いので、結局、良妻賢母規範に包摂されると山崎は分析する(山崎,2009)。

- <sup>3</sup> 岩下によると「職業婦人」という言葉は第1次大戦後にはじめてあらわれた。「職業婦人」という言葉が指す女子労働者の範囲は明確ではないが、それは従来の紡績女工のような女子労働者とは異なる新しいタイプの女子労働者を指していた(岩下,1969)。
- <sup>4</sup> 東京府社会課(1931)『求職婦人の環境調査』
- <sup>5</sup> 例えば『婦人倶楽部』での連載を断った吉屋信子にたいし、「少女小説を書いている先生の小説を読みたいと思う年齢層は『主婦之友』に多いか、『婦人倶楽部』に多いか、それを考えたら簡単におわかりになるでしょう」と説得し、『婦人倶楽部』で「女の友情」が連載されたことは有名な話である。(社会編・昭和,1959)
- <sup>6</sup> 『婦人倶楽部』の1927年1月号から松岡譲の小説『憂鬱な愛人』が連載された。講談社はこの小説の新聞広告で、作者の結婚問題をモデルにしたものであると、露骨で煽情的に喧伝した。これに対し作者の松岡は文学的作品として書いたものであり手加減をしてほしいと申し入れたが、講談社が聞き入れず、小説は連載4回で打ち切りとなった(『鶴見祐輔資料』119頁から引用)。この事件も、講談社と作家の編集・広告においての意見の不一致によって起こった騒ぎであった。
- <sup>7</sup> 野間は「理想小説とは、普通の恋愛小説でなく、社長のよくいう人倫五常をおもしろく、感激的に内容にもりこんだもの」として定義する。また、「このようなものは、普通の作家には書けない、鶴見氏ならば、きっとやるだろう。母性愛、友情、愛恋、発憤、忍苦、等をもりこんだものがほしい」と言って、鶴見に対する期待感をあらわしていた(社会編・昭,1959)。
- <sup>8</sup> 静楽寮人『家庭』「各婦人雑誌を批判す」1933年6月号
- <sup>9</sup> 吉見は、鶴見俊輔の国家への深い反抗が、父の鶴見祐輔以上に母の和子の厳格さ(明治国家を支える武士のエートス)に起因していると分析する。
- <sup>10</sup> 鶴見が野間に話したアメリカの『サタデー・イブニング・ポスト』は『キング』創刊の参考になった(社会編・昭,1959)。鶴見と野間の関係は、行動的・政治的側面を重視する点において、利害の一致した結果だと思われる。
- <sup>11</sup> 鶴見祐輔『婦人倶楽部』「『母』の出版について読者へ記者より」1929年6月号
- <sup>12</sup> 以下は講談社学術文庫出版の『母』(1987)から引用した。
- <sup>13</sup> 鶴見祐輔『母』(講談社学術文庫,1987),141頁
- <sup>14</sup> 鶴見祐輔『母』(講談社学術文庫,1987),71頁
- <sup>15</sup> 下田次郎『教育時論』「女子の職業教育と実際の教養」1918年9月号
- <sup>16</sup> 棚橋源太郎『教育時論』「家事科学展覧会の開催」1918年9月号
- <sup>17</sup> 瀬戸内晴海『婦人倶楽部』「愛惜「婦人倶楽部と私」」1988年4月号
- <sup>18</sup> 「実用記事は寄稿家の原稿を、そのまま信用して掲載するのが、各誌の例だったが、それではいけないというので、いかなる些末の記事でも、いちいちその原稿によって実験の上、掲載することにした」(社会編・昭,1959)
- <sup>19</sup> 婦人運動家の長谷川の日本女性教育への批判は、トルストイの『復活』を読んでいる朝子を前にして行われる。また、朝子は、母性愛の覚醒以前は小説を好んで読むが、覚醒以降に小説を読むことはない。
- <sup>20</sup> 鶴見祐輔『母』(講談社学術文庫,1987),465頁
- <sup>21</sup> 室伏高信『婦人倶楽部』「職業婦人の家庭は如何にして幸福にすべきか」1924年8月号
- <sup>22</sup> 『母』は、1929年6月の連載終了後に単行本として大日本雄弁会講談社から出版され、24万部もの売り上げを記録した。1929年8月には、新橋演舞場と明治座の両方で帝劇女優によって新派劇として上演される。同年に松竹蒲田によって野村芳亭演出、川田芳子主演で映画化された。大正末から昭和初期にかけて、それまで読みすてにされることが多かった婦人雑誌の通俗小説が、新しい媒体としての映画と結びついて、単行本としてベストセラーに進出した(前田,1973)例として、みることができる。
- <sup>23</sup> 1929年6月号の「『母』の出版について読者へ」、1929年7月号の「新日本を生む力」(鶴見の評論)、1929年11月号の「母の歌」(鶴見作詞)、1930年1月号の「『母』の映畫化に就て」等が確認される。
- <sup>24</sup> 『母』が1年間で340版を突破したという記事は1930年1月の『婦人倶楽部』17ページで確認される。「映画物語『母』」というこの記事は1929年松竹蒲田によって映画化された『母』の場面と『母』の内容を組み合わせで書かれた。広告の性格も強かったため誇張された部分もあると思われる。



李 承京 (イ・スンギョン)

[専攻領域] メディア、ジェンダー、近代文学  
[所属] 東京大学大学院学際情報学府 博士課程

# Women's Cultural Education and Occupation in Serial Novels in the Early Showa Period: Focusing on *Mother* by Tsurumi Yusuke(1929)

SeungKyung LEE\*

This paper examines how the norm of good wife and wise mother was discussed through the usage of the word “educated” in Yusuke Tsurumi’s *Mother*, serialized in *Fujin Club* from May 1927 to June 1929. The *Fujin Club*, started in 1920 by Dai Nippon Yubenkai Kodansha, was a magazine read by many working women and girl students in their early teens to their early twenties. Through collaboration between Seiji Noma, president of Kodansha, who tried to present the mother as an ideal female figure, and author and politician Yusuke Tsurumi, the series *Mother* was started. It can be considered that Asako, the leading character of *Mother*, who overcomes various crises in life through ideal education obtained through reading and school, could garner the empathy of the women of those times who dreamt of being independent. However, since success as a working woman was for the progressive future of her son, Asako’s success ultimately gets attributed to the norm of good wife and wise mother. However, rather than seeing the series *Mother* of the *Fujin Club* as propaganda, the author would like to consider the significance of the series to lie in its potential as a text through which the Kodansha culture, considered a symbol of anti-cultural education strategically utilized the masses’ desire for cultural education.

---

\* Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

Key Words : Cultural education, *Fujin Club*, the early Showa period, Working Women.